

4月1日の練習に参加した皆さん。
本番まで4回の練習を重ねます。
(上段左端が保存会副会長の西村久さん、真
ん中で笛を持つのが笛担当の林正英さん、
下段左が親子で参加し、太鼓担当の西村晋
治さん)

伝統を復活する力

市内各所で祭りが行われる5月。一度は途絶えた祭礼行事を復活させた地域があります。
前途多難だと言われながらも、復活を成し遂げた皆さん。二つの地域から、その原動力や
道のりを追います。

5月4日

大宝神社

サンヤレ踊り

地元に残る資料から
83年ぶりに祭りを復活

平成28年、83年ぶりに復活した
大宝神社の「サンヤレ踊り」。この
祭礼を現代によりみがえらせたのが、
笠川と市川原地域の皆さんです。

サンヤレ踊りは、五穀豊穡を願ひ
華やかな衣装で、囃子や歌に乗せる
踊り。室町時代に始まり栗東周辺で
も行われていましたが、大宝神社で
は、明治に入り途絶えます。大正4
年に復興されましたが、昭和7年に
再び途絶えてしまいました。

復活のきっかけは、西村久さん(保
存会副会長)が踊りに参加した女性
の歌を収めたカセットテープを譲り
受けたこと。西村さんは、滋賀レイ
カディア大学で地元・笠川の歴史を
調べていく過程で、「今、自分がし
なければ、将来復興されることはな
い。何とかサンヤレ踊りを地域の宝
として残したい」との思いを強くし、
有志を募ります。地域で踊りの歌詞
や太鼓と鉦の譜面も見つかったこと
も希望になりました。

平成27年5月、西村さんらは、7

人でサンヤレ踊り保存会を結成。12
月から住民説明会を4回開催して賛
同者を募りながら集まった資料をも
とに踊りを復元しました。子どもた
ちも太鼓や笛を担当し、多くの住民
の力で現代によりみがえりました。

一歩踏み出し、自ら歌うことで
高まった機運と一体感

西村さんは次のように語ります。
「当時、今年の復活は難しいとい
われましたが、今年できないのに、
来年できるはずがないとあきらめ
ませんでした。練習時、勇気を出
して一歩踏み出し、自らが歌うと、
返ってくる掛け声で何ともいえな
い一体感が生まれ、機運が高まっ
た気がします。

住民説明会では、林正英さんがフ
ルートが吹けると名乗りでて笛を指
導してくれました。笠川・市川原自
治会は計約330世帯で、新しく転
入して来られた人も増えています。
多くの人材がいて、力を合わせたか
らこそ復活できました。踊りは住民
同士の交流にもつながっています。

①③④⑤昨年の踊り。1年目は栗東西中吹奏楽部の子どもたちのみが担当していた笛に、昨年から小学生も加わりました。笛担当は小学4年生以上というきまり以外は、男女関係なく、子どもたちの自主性に任せて担当を決めています②今年も本番に向けて練習中



1



2



3



4



5

83年の年月を経て、住民の力で復活。
残っていた資料と、地域の宝として残したいという熱い思い。

残された記録を頼りに復活



4

大宝神社のサンヤレ踊り



①昭和7年に奉納された記録②踊りの歌詞や太鼓と鉦の譜面が書かれた大正8年の記録「瑞穂」③昭和54年、当時89歳の女性が唄ったものを収めたカセットテープ④保存会副会長の西村久さんが③を譲り受け、踊りをよみがえらせようと有志を募るうち、地元の民家から②が見つかり、これらの記録からイメージを復元しました。

人と資金の循環を考えながら 地域を活性化

ここには、鎌倉時代には人が住んでいたといわれています。地域にまつてこんな踊りがあったことが伝わればと思います。今後もサンヤレ踊りを継続し、まちづくりを生かすことで、『住んでよかった』と思える地域にできれば。

4月1日、3年目となる今年も練習が重ねられていました。

「昨年は笛担当でしたが、友達のお兄ちゃんがやっていたのを見てかっこよくて、今年は太鼓に立候補しました」「笛は唇の形がポイント。高い音を出すのが難しいけど楽し

い。昔の人はこんな踊りを考えてすごいと思う」と語る子どもたち。太鼓担当で、初回から親子で参加する西村晋治さんは「記録が残っていない振り付けは、他地域のサンヤレ踊りを参考にみんなで創り上げました。子どもたちが中心になれるし、地域の活性化につながっています」と話してくださいました。

「子ども会や栗東西中学校の吹奏楽部にも協力してもらい、参加者を募る」「衣装は大人用・子ども用の2種類で経費をかけない」「寄付を募り、認知度を高め、応援者を増やす」など、人と資金が循環する仕組みづくりを考えながら、地域の宝になろうとするサンヤレ踊り。今年も揃いの法被をまとい、奉納されます。

台風被害から復活した大人みこしをかつぐ皆さん。先頭の黒い法被姿が自治会長の前山茂治さん。進行方向を前に左側の先頭が川崎俊介さん。後ろが、SS会長の山元道男さん



台風で土砂をかぶったみこしを掘り出し、修復。
地域の力を合わせて守り続ける伝統。

5月5日
いおのい
五百井神社

例大祭のみこし

土砂の中から2週間後に
みこしを掘り出す

平成27年、台風の甚大な被害から2年ぶりに五百井神社の例大祭でみこしが復活しました。大きな力となったのは、下戸山地域の若い世代の皆さんです。

平成25年9月15日から16日にかけて市を襲った台風18号。平安時代にはこの地にあったと記録が残る五百井神社も、本殿や拝殿など境内の建物がほぼ全壊する状況になりました。みこし蔵も土砂をかぶり、中にあった大人みこしと子どもみこしの2基も被災しました。

この2基を守るため、約2週間後、氏子有志が2日間かけてみこしを掘り出しました。子どもみこしは簡単な修理で済み、翌年の例大祭で復活。大人みこしは、屋根がはがれるなど損傷が大きかったため、川崎俊介さんを先頭に地元の青年らが中心となり、復活に向けて取り組みました。何とかみこしを修復してほしいと、地元の大工に依頼。また、氏子だけでは担ぎ手が不足していたた

め、壮・青年会である「下戸山SS会」とも力を合わせ、担ぎ手を募りました。こうして担ぎ手として総勢約40人が集い、子どもみこしに続き、2年後に大人みこしが復活。今も希望すればだれもが担ぎ手となることができ、地域に威勢のよい掛け声が響きます。

災害から救った
地域の宝を次世代につなぐ

「昔から例大祭の日は、特別な日。体を清め、身に着けるものも新しくし、気持ちが変わりました。地元から離れていても、参加するために戻って来るような、思い入れが多い祭礼です。だからこそ、『せっかく助かった地域の宝。次世代につないでいきたい』と、復活に力を合わせました。

例えば、ひものくくり方を若い人たちに伝授したり、祭礼後に親ぼくを深めたりと、祭りは世代間交流にもつながっています。今後この地で伝えていくことができたら」と川崎さんは話します。



①ほぼ全壊した被災当時の五百井神社。鳥居も水没し、大きな被害を受けました②被災後の例大祭。土砂崩れが起きた安養寺山の痛ましい姿が残る中で小学生ら約120人がみこしをかつぎ、地域の希望になりました。



③被災から約2週間後、土砂の中からみこしを丁寧に掘り出しました④クレーン車で安全な場所に運搬⑤大人みこしを地域の職人が2週間かけて丁寧に修復

苦労を共有することで 生まれる一体感が楽しさに

SS会の山元道男会長は次のように語ります。

「川崎さんの祭りへの思いは私たちと同じでした。青年団の名称をSS会と変更してからも祭りを大切にしてきました。この日だけはみんな地元に戻ってきて地域が一体になれる日です。かねてから担ぎ手の減少という課題を解消し、より地域全体の祭りにしたいと思っていました。みこしは約300kgと重いですが、担ぐことと思いが一つになります。その重みを共有し、終わっ

た後の『やったぞ！』という一体感は、やがて楽しさに変わります。肩の痛みも担いだ人だけが分かる勲章のようなもの。時代に合った方法で継続し、地元を輝かせることができたなら」。

熱い思いで 伝統を地域で守る

「子どもみこしがあり、子どもと一緒に参加していましたが、川崎さんから声をかけていただき、自らもみこしをかつぐようになりました。氏子であるなしの垣根を越えて、地域のつながりを深められる行事で

す」と語るのは、小谷共宏さん。

自治会長の前山茂治さんは「五百井神社は、1000年を越える歴史をもつと伝わる由緒ある神社。今、下戸山自治会は600を超える世帯数になりましたが、昔から、新しく転入してきた人を誘いあつて、例大祭に参加する班もあります。楽しく、また熱い思いを持ちながら、伝統を地域で守っていきけるようにしたい」と話してくださいました。

お旅所を仮本殿とし、安全や神社の復旧を願ってきた2年間。昨年8月から被災前と同じ場所に本殿を再建する工事が進み、伝統が守り続けられています。